December 号外 2022

過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム vol.18 Document

UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES

発 行　大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）／ 企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング
（CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html　※U-CoRo=ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）

今、大きな社会の変化の渦中にあって、人々の痛みに寄り添い、直面する格差や分断、孤立の闇を越え、成長や再起を支える、物語や“場”や“道行”の文化が必要とされているのではないでしょうか。
2022年秋の上町台地 トークライブでは、四天王寺が重要な舞台として描かれた、中世・近世の説経節や絵巻等を手がかりに、救済・復活・再生の物語群の背景につきまして、日本仏教美術史がご専門の 一本崇之さんをゲストにお迎えして読み解いていくことを試みました。
会場参加者（30名限定）とリモート参加者と見逃し配信希望者を合わせて90名近くのお申し込みをいただき、当日は3年ぶりに会場を開いてフォーラムを開催。時代を越えて、社会のダイナミズムを支えるために欠かせないものは何なのか、あるいは歴史と今をつなぎ、これからの都市とコミュニティについても考える機会となりました。

「上町台地 今昔タイムズ」＊vol.18では、中世の四天王寺を象徴的な舞台の一つとした「しんとく丸」や「さんせう太夫」等の物語を入り口に、説経節に始まり、能や浄瑠璃や落語等々、人々に求められ、さまざまな芸能の姿を借りながら、時代を越えて復活や再生の物語を共有してきた、都市の文化のありように注目しました。

「上町台地 今昔タイムズ」
第18号（1面）❶▶

▼「一遍聖絵」に描かれた四天王寺（模写本、第二巻の七）❷

＊「上町台地 今昔タイムズ」や関連フォーラムのドキュメント・レポートのバックナンバーは、ホームページ「大阪ガスネットワークCEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

上町台地 今昔フォーラム vol.18

2022年 秋の上町台地トークライブを開催しました（会場＋オンラインLIVE配信）

四天王寺門前から今に続く、説経節・絵巻等の背景を読み解く

成長や再起を支える物語はなぜその”場”や”道行”を必要としたのか？

■開催日時：2022年11月8日（火）18：30～20：45頃
■LIVE会場：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21
　2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■開催・参加方法：会場（参加人数限定）＋オンライン（Zoom）LIVE配信
■出 演 者：
　ゲストスピーカー：一本 崇之（大和文華館 学芸部係長／四天王寺 特別調査員）
　　進 行 役：弘本由香里（大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 特任研究員）
■プログラム：
　プロローグ「上町台地 今昔タイムズ」vol.18から物語の系譜を俯瞰する
　スペシャルトーク「四天王寺という”場”―説経節や絵巻にみる救済・復活・再生の物語とその背景―」
　ダイアローグ（ゲストスピーカーとの対話・質疑）
　　「時代を越えて都市に求められるもの～弱者を包摂し逆転を象徴する物語・場・道行の文化から考える～」
■主催：大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所（CEL）　企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング

▲国宝『四天王寺縁起』（根本本の巻頭、四天王寺蔵）

＜2022年秋の上町台地 トークライブ・プロローグ＞

「上町台地 今昔タイムズ」vol.18 から 物語の系譜を俯瞰する

構成：大阪ガスネットワーク CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング（CEL 弘本由香里、B-train 橋本護、小倉昌美）

四天王寺と現代に続く物語群の系譜を探る

四天王寺は聖徳太子の発願で、鎮護国家と万人救済の実践所として創建され、中世には、日想観の聖地として、また熊野詣の道行の途上として、人々の往来も盛んになり、庶民の信仰を大いに集め、説経語りの場ともなっていきます。

「上町台地 今昔タイムズ」第18号の1面の前段では、当時の門前の風景に目を向け、後段では現代にも続く物語群、説経「さんせう太夫」「しんとく丸」「かるかや」「小栗判官」の系譜を簡単にご紹介しています（1頁の❶）。

「一遍聖絵」に描かれた中世の四天王寺

時宗の開祖、一遍上人の絵巻「一遍聖絵」の巻2には、中世の四天王寺の様子が描かれています（1頁の❷）。

西門の西方（左）には木の大鳥居（石造は1294年から）があり、その西側には砂浜と海が続いています。

一遍上人は、四天王寺の西大門の前で念仏札を民衆に配り始める。❸

一遍上人が衆生済度の念仏札を民衆に配り始めたのは、四天王寺の西大門の前と言われています（❸）。

中世、四天王寺は、周辺を合わせて一つの宗教都市を形成していました。熊野詣の旅人たちも往来しました。庶民の信仰を集めるとともに、聖徳太子の遺徳を継いで、社会からこぼれ落ちて苦しむ者たちを迎え入れる、最後の拠り所でもありました。

図❹は一遍聖絵から。四天王寺に赴く時宗・踊り念仏の人々の様子が描かれています。

「説経節」- 遊芸人が運んだ救いの物語

説経節は、仏教の唱道（しょうどう）（説経）から派生した、遊芸人による語り芸能です。

中世末のささら説経から、近世の操り説経（浄瑠璃説経）や歌説経へ、寺の境内や路上や小屋で演じられました。

漂泊の遊芸人が運んだ「救いの物語」は、自らを投影し、つらい境涯でも、やがて一筋の光が差すことを教え説くもので、「あらいたはしや～」と語られる哀話が人々の心を引きつけ揺さぶりました。

説経節を語る、遊芸人の図
（『人倫訓蒙図彙』元禄年間）❺

図❺は、説経節を語る、遊芸人の姿です。ささら、胡弓、三味線の組み合わせの門付芸（門説経）として描かれています。

中世に生まれた語り芸能、説経節の代表作「さんせう太夫」と「しんとく丸」では、四天王寺が主人公の復活の舞台として、また、「かるかや」と「小栗判官」でも、上町台地は道中の重要地として登場します。「極楽の東門」が立つ、四天王寺と上町台地は、漂泊の途上で成長と再生の物語を宿す場所、復活への道行を象徴する場と考えられていたことがうかがえます。

五説経と呼ばれる5つの作品のうちこれら4つの作品は、漂泊の経験をもとにしている点で共通し、中世のささら説経の古形を残しているものと言われています。

説経節「さんせう太夫」の系譜から

4つの説経節の系譜をざっと眺めてまいりましょう。

物語の粗筋は、のちほど、一本崇之さんがお話してくださいますので、ここでは象徴的な場面や事柄の断片だけご覧いただきます。

まずは、「さんせう太夫」の系譜からです。

流浪し落剥した末に四天王寺に辿り着いた厨子王は再生の道を歩みはじめます。

「せつきやう さんせう太夫」挿絵
四天王寺の西門前で、鳥居にすがりながら厨子王は立ち上がる。（江戸時代の説経正本 1656年）❻

図❻は、「せつきやう さんせう太夫」の挿絵で、四天王寺西門前で、落剥して足も立たなくなっていた厨子王が、阿闍梨（あじゃり）に出会って、奇跡的に立ち上がる場面です。

森鷗外の小説「山椒大夫」

四天王寺西門の石鳥居
扁額には「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」とあり、同寺の西門が極楽浄土の東門に当たるとしている。

（1915年）は、近代的な解釈で翻案され、説経節では重要な場面である、四天王寺での厨子王の復活譚や凄惨な復讐譚は描かれていません。

しかし、鴎外の「山椒大夫」は、「安寿と厨子王」と題する読み物や絵本になって広く普及し、戦後アニメや映画もつくられました。溝口健二監督による映画「山椒大夫」は、1954年に第15回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞しています（❼）。

「しんとく丸」の系譜から

主人公のしんとく丸は、継母の呪いによって宿病に侵され、絶望の淵に陥りますが、四天王寺を重要な舞台として、許嫁の乙姫の献身的な愛と観音の霊力によって救われます。

図❽は、「せつきやうしんとく丸」の挿絵で、四天王寺にたどり着き、絶望して眠りについた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れる場面です。

「せつきやう しんとく丸」挿絵
絶望して眠りについた、しんとく丸の枕元に清水の観音が現れる。（江戸時代の説経正本 1648年）❽

「しんとく丸」の伝説を淵源に、春の彼岸の四天王寺を舞台に、日想観と重ね合わせた能（謡曲）の名曲「弱法師（よろぼし）」が生み出され（❾）、その後に浄瑠璃・歌舞伎の名作「摂州合邦辻」が生まれました。

これらに触発されて、現在に至るまで文学作品や戯曲など、様々な形に展開しています。

業病を持つ田楽法師を描いた折口信夫の小説「身毒丸」は、伝説の原始の姿に迫ろうとしたものです。異能の人、寺山修司も伝説的な舞台作品「身毒丸」を生みだしました。古典から前衛まで、創造の水脈がつながっています（❿）。

「かるかや」の系譜と石童丸

次は、「かるかや」の系譜からです。妻子を捨てて出家した武士、苅萱道心とその息子石童丸の物語ですが、父を知らずに育った石童丸は母と共に父親探しの旅に出ます。父らしき者がいるという高野山に向かう旅の途中で、二人は上町台地を通ります。

石童丸の物語は、絵草紙や現代の絵本にまで受け継がれています。図⓫は、江戸時代の説経正本「せつきやうかるかや」の挿絵と、幕末の錦絵「苅萱道心・石童丸」で、当時の人気のほどがうかがえます。

「せつきやう かるかや」挿絵
（江戸時代の説経正本 1631年）、錦絵「苅萱道心・石童丸」（豊国、1853年）⓫

「小栗判官」の系譜から

「小栗判官」のお話では、餓鬼阿弥の姿と化してあの世からこの世に戻った小栗判官は、土車に乗せられて人々に引かれながら、復活の地「熊野」を目指す途中で四天王寺の門前を通って行きます。

「小栗判官絵巻」（⓬）は、全15巻、300メートルを超える大作で、現在は宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵しているものです。江戸時代初期の人気絵師・岩佐又兵衛作と伝えられ、浄瑠璃操りの正本に沿った詞書とともに展開され、劇的で変化に富み、歴史資料としても高い価値のあるものです。

土車に乗せられた小栗判官は人々に引かれて四天王寺の前を通る。（「小栗判官絵巻」第13 巻 第24 段 天王寺、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）⓬

実は、この天王寺の段は、これまでほとんど紹介されていないのですが、必ず描かれているはずだと思って探しました。今回宮内庁の承諾を得て、こうして画像をご覧いただく機会ができたことを、大変嬉しく思っています。

この話に材を取り、近松門左衛門は「当流小栗判官」を書いて人気を集め、歌舞伎にもなり、仮名草紙や読本として受け継がれていきました。近代には講談でも語られ、現代のスーパー歌舞伎「オグリ」などの舞台作品にもなっています。エンタテイメントの原型とも言える存在で、人々をひきつけてやまない、尽きない魅力を湛えています。

露払いはここまでとして、この後、一本崇之さんのスペシャルトークにて、本日のテーマの核心に迫ってまいります。

＜2022年 秋の上町台地 トークライブ＞

四天王寺門前から今に続く、説経節・絵巻等の背景を読み解く 成長や再起を支える物語はなぜその"場"や"道行"を必要としたのか?

ゲストスピーカー：**一本崇之**（大和文華館 学芸部係長／四天王寺 特別調査員）
進行役：**弘本由香里**（大阪ガスネットワーク エネルギー・文化研究所 特任研究員）

＜スペシャルトーク＞

● 四天王寺という"場" —説経節や絵巻にみる救済・復活・再生の物語とその背景—

一本崇之 いちもと・たかゆき

大和文華館 学芸部係長／四天王寺 特別調査員
四天王寺勧学部文化財係主任・学芸員を経て、2022年より現職。専門は日本仏教美術史。前職では、同寺の文化財調査や展覧会の企画を通して、四天王寺史ならびに聖徳太子信仰美術の研究に取り組んできた。共著に『聖徳太子と四天王寺』(石川知彦監修、和宗総本山四天王寺編、法藏館、2021年)などがある。

四天王寺の起源と3つのエリア

戦前まで、四天王寺は長らく天台宗に所属していたのですが、戦後すぐに独立して、現在は和宗の総本山となっています。

遡れば6世紀に日本に仏教が伝わってきた時に、それを広めようとした蘇我氏と反対する物部氏との間に合戦が起こりました。その際、幼い頃から仏教に親しんでいた聖徳太子（当時は厩戸皇子）は、この戦では蘇我方についたのです。

しかし、戦力としては圧倒的に物部氏が有利で、当初はかなり劣勢でした。そこで聖徳太子は、自らの手で四天王の像を彫って、この戦に勝たせてくだされば、きっと四天王を祀るお寺を建てましょうと誓願を立てられたのです。その結果、見事に逆転をして勝利し、推古天皇元（593）年この難波の地に四天王寺をつくったのが、四天王寺の起源だと言われています。

『日本書紀』に出てくるということで、聖徳太子建立の寺として位置づけられてきた四天王寺は、いわゆる日本最古の官寺です。

四天王寺は、「信仰の百貨店」とも言われるように非常に多様な信仰を包括していますが、その信仰の大きな柱に応じて、四天王寺は大きく3つのエリアに分けられます。

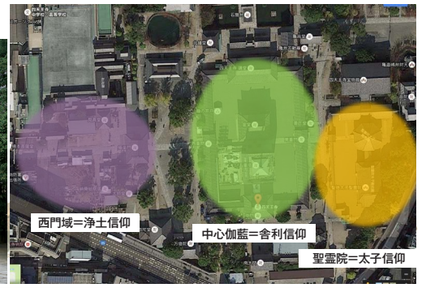
まず、最も重要なポイントとしては、聖徳太子への信仰があり、その中心である聖霊院が挙げられます。

次に中心伽藍。そこには五重塔と金堂があり、いわゆる舎利信仰の場となります。また本尊は救世観音ですが、観音信仰の場としても重要な場所です。

それから今日の話のメインになっている西門という場所があります。四天王寺から見て西側。現在の四天王寺高校の前にあるのが西大門です。別名「極楽門」とも言いますけれど、西門にある鳥居からこの極楽門との間の参道のエリアが、四天王寺の浄土信仰の場として非常に重要で、いろいろな救済活動の場として大きな役割を果たすことになります。

聖徳太子を祀る聖霊院

四天王寺の3つのエリア



小栗判官が通った道

説経節は、中世から近世において、仏教の唱道をベースとした、民衆の間に広まった芸能です。「さんせう太夫」「しんとく丸」「小栗判官」「かるかや」、それから「愛護の若」の五つが五説経とされています。

今日は「さんせう太夫」「しんとく丸」「小栗判官」について、これらがどのように四天王寺と関わっているのかということからお話したいと思います。

まず「小栗判官」のあらすじをみておきましょう。主人公は小栗判官という武者です。非常に豪快な者でありまして、武蔵相模の横山のお姫様と強引に契りを結んでしまいます。これに怒った横山が、小栗を彼の家臣10人とともに毒殺してしまうのです。小栗は、その10人と一緒に地獄に落ちるのですが、家臣たちは閻魔大王に小栗だけは助けてほしいと懇願します。これを聞いて、閻魔さんも家臣の忠誠心に免じて、小栗だけは戻してやろうということになります。ただし、ただでは難しいということで、小栗は非常に醜い餓鬼の姿で娑婆の世界、現在の神奈川県藤沢の遊行寺の上人のところに戻されます。

絵巻の中では骸骨みたいな姿に描かれていますが、いわゆる餓鬼の姿で地獄から蘇ったわけです。そこに閻魔さんが「この者を熊野本宮に連れてやるように」という札を下げてくださっていたので、藤沢の上人もそれならばということで、小栗を乗せた土車を自ら引いて、えっちらおっちら熊野を目指すわけです。途中で上人は引くのを断念するんですけども、いろんな人が手伝って熊野までたどり着き、今もある湯の峯温泉の壺湯につかり、復活するというお話です。

実は、このお話の中では、四天王寺については少ししか出てきません。熊野は浄土信仰において非常に重要な場所なのですが、熊野街道が四天王寺を経由しており、そこが復活の場所だという信仰があったということで、まずは四天王寺を目指したわけです。藤沢の方から中山道を通って熊野を目指すという形なのですが、これに熊野街道を通るということが一つのポイントになっています。

熊野街道というのは京都からずっと熊野を目指す街道なんです。京都から淀川を下って今の天満橋辺りから上陸し、そこから南下して紀伊半島の西の海岸沿いに進み、和歌山の田辺の方へ向かっていくわけです。これを「紀伊路」あるいは「紀路」と言いますけれども、その途中で上町台地を進んで、必ず四天王寺それから住吉大社を経由したんです。

熊野街道とその他の道筋

引用：東紀州ほっとネット くまどこ http://kumadoco.net

ちなみに小栗が復活を目指して通ったことで、熊野街道のこの紀伊路を別名「小栗街道」とも言うわけです。

ともかく小栗判官は熊野街道を通って熊野を目指し、そこで復活するわけです。

厨子王が復活した四天王寺

次は「さんせう太夫」の話で、これも非常に長い話なんですが、おおまかなあらすじを申します。

奥州に岩城判官という武将がいましたが、太宰府に流罪になります。その子、安寿と厨子王の姉弟は、父の窮状を聞いて、母親と乳母とともに都へ向かうんですが、旅の道中でひどい目に遭います。二人は騙されて、山椒太夫に売られてしまうんです。厨子王は命からがら抜け出すんですけども、結局安寿は殺されてしまう。姉の献身でやっと逃れた厨子王でしたが、一旦都には行くんですけれども、非常に衰弱してしまっている彼を誰も面倒をみる人はいないということで、最終的に四天王寺へ、半ば捨てられるようにして連れて来られたんです

四天王寺に着くと、それまで立ち上がれなかった厨子王が、西門の鳥居のところでつかまって、急に立ち上がることができたのです。そこへちょうど通りかかった大阿闍梨（位の高いお坊さん）に出会って、厨子王はいろいろと世話になって復活する。最後には非常に偉くなったんですね。その後に、山椒太夫たちを捕らえて、非常に凄惨な方法で復讐を遂げるというお話です。

この厨子王は一旦、都に行くわけです。そこにはいろんな子どもたちがいて、可哀そうだからいうことで数日は助けてくれるんですけれども、結局誰もずっと続けるわけにはいかず、もう他に行き場がないということで、衰弱したままで四天王寺に連れて行かれるんです。

四天王寺というのはそういう場所でした。もう本当に誰も面倒が見られないから仕方なく連れて行きましょうということでしたが、最終的に厨子王は四天王寺に来て、そこで復活するのですね。ここでも四天王寺は人生を逆転する場所として出てくるわけです。

説経節「しんとく丸」と高安長者伝説

次に「しんとく丸」です。主人公の信徳丸というのは河内の高安長者の一人息子でしたが、実のお母さんが亡くなってしまい、その後、継母が自分の息子を跡継ぎにしたいということで、あることないことを夫に吹きこんで、彼を追い出すわけです。

そしてこの継母が主人公に呪いをかけたんですね。彼はその呪いによって深刻な病気になります。ただの病気ではなくて、いわゆる歴史的に言うところのライ病、ハンセン病です。そういう病気にさせてしまうことで、病んだ姿で信徳丸は四天王寺に捨てられてしまうんです。。

その信徳丸が、熊野に行けば元に戻ることができるという清水観音のお告げを受けて熊野に向かうんですけれども、その途中で許嫁の乙姫の館を訪れ、そこで非常な侮蔑を受けて、結局そのまま四天王寺に戻っていくんです。四天王寺で彼は餓死しようとするんですけれども、その後、夢枕に立った清水の観音のご利益によって、復活することができたというのが、説経節の「しんとく丸」のあらすじです。つまり、一度は熊野を目指すのですが、乙姫の館で断念して四天王寺に戻ってきて、そこで復活を果たすという物語でした。

実は、しんとく丸伝説には、いろいろな系譜のお話が存在しています。どれも河内の高安長者伝説を起源とするものなんですけれども、元々の話は四天王寺の観音に祈願して復活するという話となっています。

この説経節では、なぜか京都の清水寺の観音さんのご加護という話になっています。

さらに謡曲、いわゆるお能ですね。「弱法師」という謡曲では祈願をする先が、西門で夕陽を拝む日想観になるんです。観音様にお願いした場合はちゃんと復活できたんですが、弱法師の場合は実は復活できてないんですね。これは後で改めてお話をしたいと思います。

この「しんとく丸」のお話は、文楽や歌舞伎では、「愛護の若」にみる継母とのいわゆる禁断の恋という題材なども組み合わさって、「摂州合邦辻」というお話になっていきます。

ちなみに、寺山修司さんの戯曲「身毒丸」は、蜷川幸雄さん演出で俳優の藤原竜也さんがデビューしたことでも有名な作品ですね。

今紹介した三つの説経節では、熊野や四天王寺は、非常にひどい境遇にあった人が最終的に辿り着く場として登場しています。ではなぜ、これらがそうした場所として選ばれるのかということを考えてみたいと思います。

『四天王寺縁起』の出現

四天王寺の歴史上において非常に重要な出来事は、『四天王寺縁起』の出現でした。

寛弘4（1007）年に四天王寺のお坊さんが金堂の金塗りの六重塔の中から、一巻の巻物を発見します。この縁起の奥書きには「推古3（595）年に聖徳太子が、この縁起を書き留め、金堂の中に納め置く」と書かれてありました。つまり聖徳太子が自らこの縁起を書いて、自分でサインをして金堂に置いときましたということなのです。さらにうっすらと手形が見えるかと思いますが、自筆の証として手形を全面にわたって26個押したというのが、この『四天王寺縁起』です。

この縁起が平安時代に突如として出てくるんです。そして、この縁起の中に書かれている言葉は、聖徳太子の本人のものであるというわけです。これは非常に重要な点で、この縁起に書かれている内容が、四天王寺における信仰の根拠となるわけです。なぜかというと太子自らが書き残したそのものであるからということですね。

平安時代に発見された『四天王寺縁起』 巻頭

国宝『四天王寺縁起』（根本本）、巻頭、四天王寺

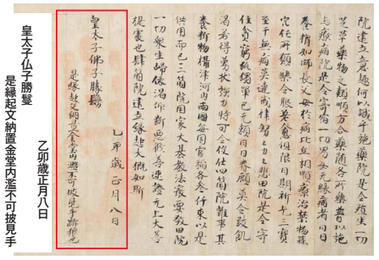
現在の研究では、この縁起は見つかった平安時代に作られたものだと考えられているんですが、当時の人々は、これが太子の「肉声」であると信じて疑わなかったんですね。なぜなら聖徳太子が建てた四天王寺ですから、太子の文書が出てくるというのはある意味当然のことであり、全く不思議ではないと思われたのです。以後この縁起は厚い信仰を集めたのでした。

ではなぜこのような縁起が、平安時代に突如出現したのでしょうか。そこには、当時の四天王寺を取り巻く時代の要素が非常に大きく影響しています。

四天王寺はもともと天台宗に属していますが、平安時代になると天台宗を中心に「末法思想」の考えが広まります。「末法」とは、仏教の教えが力を失ってしまう時期のことで、当時の人々にとって仏教の教えがない世界というのはこの世の終わりを意味しますので、その到来は現在の我々が想像する以上に非常に切実な問題となっていました。

そこで、天台宗の恵心僧都源信が寛和元（985）年に『往生要集』を著し、末法が来る時代に向けて、今我々がいる穢れた世俗の世界を抜け出し、清らかな極楽へ往生することが唯一の救いの道であると説いたのでした。そういう時代背景のもとで、『四天王寺縁起』が出現してくるのです。

『四天王寺縁起』の巻末



四天王寺の焼亡と縁起の活用

天台宗の根本経典は法華経であり、これを日本に広めたのは最澄とその前には聖徳太子なんです。四天王寺は聖徳太子建立の寺院ですから、天台宗でも四天王寺を重要視し、四天王寺との関わりを強くしたいと考えていた背景があります。

四天王寺には聖霊院があり、そして『四天王寺縁起』があります。ここに最澄をはじめ、円仁、円珍など高名な天台僧が頻繁に参詣します。さらに11世紀に入ると、四天王寺の別当という、いわゆる四天王寺の宗教上のトップに天台僧が就くようになります。このような形で、平安時代には四天王寺は天台宗との関係を非常に深めていきました。

実は天徳4（960）年に、四天王寺は大きな転機を迎えています。この年、四天王寺はほとんどの伽藍を焼失するんです。これは、『日本紀略』に「難波天王寺焼亡」とのみ出ている記事ですが、実際に戦後の発掘調査によって、南大門から食堂に至るまで、講堂以外の主要伽藍のほとんどを焼失したことが判明しています。

四天王寺は、おそらく創建以来初めて、伽藍のほぼすべてを失ったことで、お寺は大変に疲弊しているんです。しかし、そうした伽藍焼失から復興していく際に、ただ伽藍を元に戻すだけではなくて、新しい信者や信仰を獲得して、根本的に立て直すことを目指しました。

そこで当時、注目されていた浄土信仰を、『四天王寺縁起』において太子に語らせる形で取り入れたのだと思います。こうして、四天王寺にとって非常に重要な信仰が生まれて展開していくことになります。

浄土信仰の聖地となった四天王寺

説経節との関わりでいうと、まず浄土信仰の影響が大きいのではないかと思います。四天王寺は浄土信仰の聖地となっているわけですが、ではなぜそうなったのか、『四天王寺縁起』の内容を見てみましょう。

縁起の中の冒頭の部分に、「斯処昔釈迦如来転法輪所」「宝塔金堂相当極楽浄土東門中心」という言葉が書いてあります。

再度思い出していただきたいんですが、この言葉は太子が語っているということです。ここ四天王寺は「釈迦如来転法輪所」で、つまりお釈迦さんが仏教の教えを広めた場所という意味で、「宝塔金堂相当極楽浄土東門中心」という言葉は、その四天王寺の五重塔と金堂が極楽浄土の東門の中心に相当しますよということです。

四天王寺の鳥居からまっすぐ西に進むと、西方極楽浄土の東門のど真ん中にあたりますよと。つまり四天王寺というのは極楽浄土の東門であるということです。そういう言葉がこの『四天王寺縁起』の中に出てくるんですね。

さらに以下のような内容が続きます。四天王寺に1本のお香や花でもいいのでそれを捧げて供養する、わずかでも供物を持って四天王寺に参拝する、あるいは遠くにあっても四天王寺という名前を聞いただけでもよいし、さらには遠くからでもいいので四天王寺の方に向って合掌してお参りをする、そういう気持ちを持った人は、それだけで浄土との縁を結べるのだと書いています。

こういうことを縁起の中で聖徳太子が語っていることで、末法の世の到来に非常に怯えていた当時の人々は、救いを求めてこぞって四天王寺にお参りにくるようになったわけです。

この縁起の内容は広く流布したようで、例えば一遍聖絵の四天王寺参籠の場面の詞書きには、一遍上人が初めて四天王寺にやってきたとき、この伽藍は釈迦如来の「転法輪所」で極楽の「東門中心」であり、浄土と縁を結ぶ場所であったがゆえに、上人は念仏を勧めて衆生を救済することをこの地で発願した、というようなお話が書かれています。

一遍上人が、賦算という衆生救済の念仏のお札の配布を初めて行った場所が四天王寺なのです。その理由としては、先ほど出てきた場所が浄土の入り口、東門であるというわけで、そういった太子の言葉が非常に影響していたのだと思います。一遍聖絵には、朱塗りの鳥居と極楽門の間で一遍上人がそのお札を配っている様子が描かれています。

亀井堂 亀形石槽

さらに、一遍聖絵の詞書きには「亀井」の水が出てきますが、現在も四天王寺の境内の亀井堂に亀の石（亀形石槽）があり、供養の霊水として使われています。写真は、調査のために一時的に水を抜いていますが、現在もそこに水が流れていて、極楽浄土へ導く霊水として、昔から大変信仰を集めた場所です。なお2016年から19年にかけて初めての学術調査を実施しまして、7世紀にさかのぼる非常に古い石造遺品であるということが判明しています。

修行の場として西門エリアを整備

さらにこの西門エリアでは、この場所を極楽往生するための修行ができる場所として整備していくことが進められていきます。

浄土信仰の中で重要な経典として挙げられるのが「観無量寿経」というお経です。これは極楽往生するためにはどうすればいいのか、お釈迦さんが極楽往生するための方法を教えてくれるという、そういうお経です。その中に極楽往生するための修行方法が説かれています。

その中では、心の中に阿弥陀さんのいる西方極楽浄土をはっきりイメージするというのが最終目標として掲げられますが、しかし、いきなりそれは難しいですよね。ですから、まずは極楽浄土にある樹木を想像しましょう。次に建物を想像しましょう。というふうに浄土のパーツ、パーツを順番に一つ一つイメージしていって、最終的に極楽浄土全体をイメージしましょうと説かれています。

西方に沈む夕陽を拝む「日想観」

それでは、その修行の中で最初に何をすればよいのかということで、お経では、まず西に沈む夕陽を拝みましょうということが説かれています。

極楽浄土のある方角に沈む夕陽を礼拝して、その光を心の中にイメージしましょうというのが、この修行の最初です。これが「日想観」という修行で、いわゆる極楽往生するための第一歩となります。では、この日想観が西門とどのようにかかわるのでしょか。

四天王寺は、ご承知の通り上町台地という少し小高い丘に建っています。四天王寺の内側から境内の外を見ると、今はいろんなビルが立ち並んでいますが、平安時代の頃には、この鳥居から西に海の水平線が広がっていて、そこに夕陽が沈む様子が一望できたそうです。そして毎年春と秋のお彼岸には、夕陽が真西に、ちょうど西門や鳥居のど真ん中の方角に沈むわけです。

これは、ぜひ実際に現地で体験していただきたいんですけれども、この夕陽の光は、本当に目も開けていられないようなまばゆいもので、体中が光につつまれる、そういう非常に神秘的な光景が広がります。

そしてこの夕陽のいわばイリュージョンを体験できる場所が四天王寺の西門で、そういう立地を生かした一種の神秘体験を伴っているわけです。

極楽門に沈む夕陽

人々の信仰については、言葉でどれだけ説明するよりも、実際に体験することができる方が大きいということがあります。何の情報もない人たちが、こういう神秘的な体験をすると、本当にこの先には浄土があるかもしれないという思いに至るのも無理はありません。四天王寺の西門で浄土信仰が非常に信仰を集めたことの背景には、立地を活かした舞台装置を整備したというのが一つの大きな要因としてあったと言えるでしょう。

春と秋のお彼岸頃に天気が良ければ、ぜひ現地に来ていただいて、実際に体験していただければと思います。

ところで、なぜお寺に鳥居があるのかというのはよく訊かれることです。そもそも、本来鳥居には二つの世界を隔てるゲートという役割があります。例えば、神社においては、我々がいる俗世界と、神様がいる聖域という二つの世界を隔てるゲートとして鳥居があるのです。

実は四天王寺の場合も同じで、我々がいる世俗の世界と極楽浄土の世界を隔てるゲートとして、この鳥居があるわけです。そのため、面白いことに四天王寺の鳥居は、お寺の中から境内の外＝極楽を眺めるという視線軸が正しい見方となっています。

現世では復活できない弱法師

説経節「しんとく丸」では、四天王寺の観音様にお願いしたら復活できるというが筋になっていますが、西門の日想観で祈願する謡曲の「弱法師」では復活が果たせないという筋書きになっています。

主人公の弱法師は、流浪して目も見えなくなって、四天王寺に辿り着き、西門で日想観をするんです。そうすると、あまりの光に、一瞬自分の目が見えたような錯覚に陥って、彼は喜び上がって駆け回る。でも実際は見えてないので、周りの人だかりに揉まれて倒れ込んでしまう。ふと我に返ると全く何も見えない。悲嘆した主人公は、もう決してそういうことには心を動かされないぞと決意する。そ

四天王寺で夕陽を拝む弱法師

「弱法師」、下村観山、大正時代、四天王寺

ういう場面が描かれます。

このお話では、浄土信仰が大きく影響しているものとみられます。先ほどもお話したように、浄土信仰では唯一の救いは、浄土に行くことであり、現世にいる限り救いはないわけですね。浄土に行って初めて救われる。だから、もう生きている間は、そんな救いはないのだという浄土的思想が強く反映されています。いわゆるこの世の無常観ですね。日想観は来世での極楽往生を願うものですから、「弱法師」では、日想観で祈願をしても、現世では決して救われないというむなしさが物語に漂っています。祈願の対象によって、物語の結末が変わっていくのも興味深い点です。

四天王寺の2つの念仏堂

鳥居と極楽門の話をしましたが、その間には、かつて2つの念仏堂がありました。これは、天皇も含めて、高貴な人が修行する場所として建てられていたんです。この念仏堂が江戸時代になりますと、短聲堂と引聲堂という名の2つのお堂として、継承されているんですね。

説経節「しんとく丸」では、主人公が熊野を目指すものの、乙姫の館でひどく侮蔑されて、いっそ四天王寺で餓死しようと思って戻ってくるのですが、その死に場所として選んだのが、引聲堂でした。最後にはこの引聲堂に乙姫が追ってきて、再会を遂げる場所にもなります。この2つのお堂は、近代まで現存していましたが、昭和20年の空襲で焼失しています。

さらに、一遍聖絵を見ると、面白い描写があります。鳥居と極楽門のところですが、よく見ると目隠しをした人たちが鳥居の方に向かって歩いています。これは庶民の間で流行った、目隠しをして極楽門から鳥居まで無事に歩いてくぐることができれば極楽往生できるという「浄土詣り」という遊びです。

「一遍聖絵」に描かれた「浄土詣り」の様子

「一遍聖絵」第二巻
（部分、模写本、国立国会図書館デジタルコレクション）

この鳥居と目隠しをした人たちのモチーフと五重塔があれば、誰もがそこが四天王寺だと分かるというように、いわゆるシンボル的に認識されていて、中世の聖徳太子絵伝などに頻繁に描かれるようになります。

浄土信仰の聖地化と四箇院

四天王寺がなぜ救済の場として見なされるようになったのかということについて、私がもう一つ重要だと考えることに、四箇院制度というものがあります。

これは『四天王寺縁起』の中に四箇院として登場するもので、聖徳太子が設けたとされる施薬院・悲田院・療病院・敬田院の四つの施設です。

縁起の巻末には、四箇院を建立する目的として次のような記述があります。

まず施薬院というのは、薬を施すところです。施薬院では薬草類を栽培して、それを薬として調合し、求めに応じて配るとあります。

その次に療病院は、いわゆる病院のことで、男女の性別にかかわらず無縁の病人を寄宿させて、先生や父母のような優しい心を持って日々養育する場所だと縁起には書かれています。

続いて、病気のお坊さんに対しては、禁物の蒜（ひる）、宍（しし）を与える、とあります。蒜というのはニンニクなどの臭いの強い野菜で、宍というのは、鹿や猪の肉のことです。現在でも滋養強壮によい食べ物ですね。本来お坊さんはこうしたものを食べてはいけないのですが、病気のお坊さんに限っては、願いがあれば期限を限って、治療のためにそれを与えるとしています。ただし病気が治ったならば、戒律に違わぬよう努めなさいと説きます。非常に柔軟で合理的な考え方ですね。

さらに、悲田院は、貧しく、孤独で身寄りのない者を寄住させて日々養うところで、そうした人々を喉が渇いたり飢えたりしないようにお世話しますとあります。加えてここからが重要なのですが、もし「勇状強力」の時になれば四箇院の雑事に携わるようにするとしています。

つまり、弱っている間は懇ろに養うけれども、元気になったら四箇院の仕事を手伝いましょうということです。無条件に施しを与えるのではなくて、きちんと元気になったら、それを四箇院や社会に還元しましょうと、いわゆる社会復帰を促しているわけですね。

そして最後には、四天王寺の本体である敬田院が、悪を断って善い行いをすることで菩薩の境地に至るところであると説いています。

太子は、特に施薬・療病・悲田の三院の考え方というのが、国の大本であって、また仏の教えの中でも最も重要なものだと、縁起の中で語っています。今の感覚でみても非常に合理的で、社会福祉のあり方として共感できる考え方ですね。

四箇院は、今まで本当に見捨てられてきたような人たちを飢えないように養うとともに、それだけではなく、その後の社会復帰も助けてくれる。そういう場所が四天王寺であったということです。こうしたことが再生復活の象徴になって

『四天王寺縁起』巻末の四箇院に関する記述

復四箇院建立意趣、何以識乎、施薬院、是令殖生一切芝草薬物之類、順方合薬、随各所楽、普以施与、療病院、是令寄宿一切男女无縁病者、日日養育、如師長父母、於病比丘、相順療治、禁物蒜宍、任所願楽、令服差愈、但限日期、祈乞三宝、至于無病、莫違戒律、努々力々、悲田院、是令寄住貧窮孤独単己无頼、日日眷顧、莫令至飢渇、若得勇状強力時、可令役仕四箇院雑事、其養料物、摂津河内両国、毎国官稲各参仟束、以是共用而已、三箇院、国家大基、教法最要、敬田院、一切衆生帰依渇仰、断悪修善、速証无上大菩薩処也、肆箇院建立縁起、大概如斯

乙卯歳正月八日

皇太子仏子勝鬘

是縁起文納置金堂内、濫不可披見、手跡狼也

いるわけです。

四天王寺は、そういった社会的な弱者の方が集まる場所であったので、例えば一遍聖絵にも、鳥居の南側に小さな小屋を建てて生活をしている様子が描かれています。四天王寺には、こういう人たちを決して排除せずに、受け入れてきたという背景があるわけです。

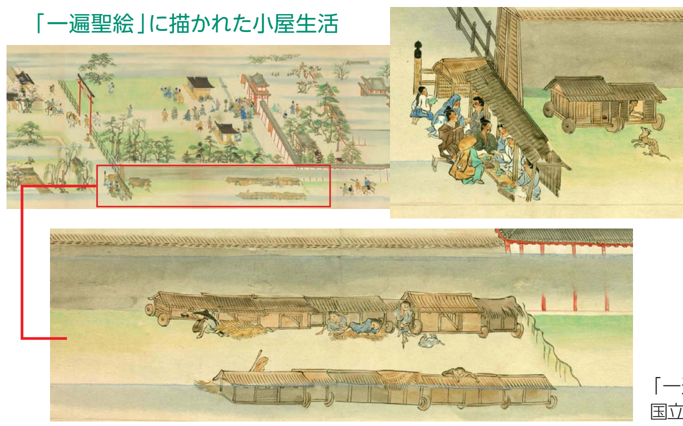
ちなみにその四箇院はどこにあったのかということを確認しておきましょう。縁起によると、乾（いぬい）の角に施薬院、艮（うしとら）の角に悲田院があり、その両者の中間に療病院があったそうです。そしてそれらは境内の外にあったといいます。

四天王寺の乾（北西）の角ですが、これは現在、四天王寺前夕陽ヶ丘駅を降りたすぐ横にある勝鬘院がこの施薬院の場所にあたります。

そこからちょうど反対側、四天王寺の艮（北東）の角にあるのが悲田院の場所で、おそらく今の天王寺区真法院町の辺りかと思われます。

そして、その中間に療病院があったそうですから、場所は今の天王寺警察署付近になりますね。

「一遍聖絵」に描かれた小屋生活



「一遍聖絵」第二巻（部分、模写本、国立国会図書館デジタルコレクション）

救いの場としての四天王寺

最後のまとめとなりますが、四天王寺というのが、まず『四天王寺縁起』によって裏付けされた、浄土信仰の聖地であり、衆生救済の地であるということです。

これは四天王寺への信仰が実際に聖徳太子の言葉に裏付けされており、救いを求めてやってきた人々がお寺に来てみると、水平線に沈む夕陽の光に包まれるという、一種のイリュージョンを体験する。夕陽を一望できる立地を生かした舞台装置が整えられ、言葉だけではなく、体験を伴うことで来世に対する救済への大きな説得力が生まれるわけです。

さらに四箇院の整備によって、社会的弱者がただ助けられるだけではなく、元気になったら社会復帰を促すという、そういう救済の環境が整っていた。つまり実際に現世においても救済してくれるという環境が整っているということなんですね。

聖徳太子が本当に国の大本として目指した社会福祉実践の場として四天王寺が整備され、また、来世から現世において、救いを求める人たちが救済される場として整えられてきたということでした。こういった二重構造があったわけです。それが聖徳太子の本願であったわけです。

天皇や貴族など身分の高い人だけではなく、民衆、特に境遇に恵まれない社会的な弱者の人たちが最終的に救済される場として広く認知されていた四天王寺。こうした救済の地の四天王寺というイメージが広まっていたからこそ、説経節の中で非常に不遇な境遇にある主人公たちが救いを求めて四天王にやってきて、救済復活される舞台になったんだろうと考えています。

ダイアローグ

時代を越えて都市に求められるもの ～弱者を包摂し逆転を象徴する物語・場・道行の文化から考える～

重要な地域の人たちとの相互の関係性

弘本　ここからのダイアローグのテーマは、「時代を越えて都市に求められるもの」です。非常に大きなテーマですので、短い時間ではとても話し切れないと思いますが、できましたら、それを考えるきっかけになるような論点というものを皆さんと共有できたらと思います。

例えば、大阪というのは、実は全国に先駆けて社会事業を行ってきた素晴らしい歴史がある都市なんです。実際、過去の「上町台地今昔タイムズ」の取材などでお会いした方の中でも、実は多くの人たちが聖徳太子の思想というものについて語られているんです。この地域には、時を越えて、社会福祉の思想が強く宿っているということに驚かされます。聖徳太子に遡る存在が、日本の社会だとか、大阪の気質とか文化といったものに及ぼした影響は計り知れないと思うんです。

そういうことも含めまして、まずは、一本さんが、お考えになられていることなどをお聞かせいただけたらと思います。

一本　お話したように、四天王寺というお寺は、天台僧だけでなく、例えば弘法大師をはじめ、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞あるいは時宗の一遍上人ほか、いろんな宗派のお祖師さんが訪れた場所でした。それぞれの宗派の信徒にとって、お祖師さんとゆかりのある四天王寺は、宗派にとらわれない寺として民衆にとって開かれた寺だったんだと思います。

さらに、四天王寺は、熊野詣だったり、あるいは西国三十三カ所霊場という巡礼の重要な経由地でした。同時に、ここはもちろん浄土信仰の聖地でありましたので、熊野にしても西国霊場にしてもそれを目指すのは、極楽浄土に往生するのが目的ですから、四天王寺は必ず巡礼してみたいところでした。要するに、いろんな人たちが集まっている場所、気軽に願い事ができる場所であり、四天王寺は信仰における心のよりどころであり、現在のわれわれが思う以上にはるかに大きな存在だったのかもしれません。それは同時に、地域の人たちにとっても精神的な柱だったんじゃないかなというふうに私は考えています。

一遍聖絵にも大勢の民衆が描かれていますが、実は天王寺村のお百姓さんたちが実際にお寺の仕事を手伝っていたようです。何か大きな行事や、建物の建て替え工事を行うとなったときは、村周辺の職人さんがそれに従事するという構造が出来上がっていました。そうした組織とともに、四天王寺は周辺地域のコミュニティの中心的な場所でもあったようです。それが古くから長い間そういう関係性が続いているということです。

そうしたお寺が、例えば戦争とか災害で失われてしまったら、地域の人たちにとっての喪失感は相当大きなものだったろうと想像できます。ですので、いつの時代でも四天王寺に何かあった時には、地域の人たちが一致団結して復活してもらおうと尽力するわけです。そういうことが、大阪の人の気質みたいなものにも底流としてつながっているのではないかと感じており、四天王寺が地域コミュニティの核になってきたのではないかと考えています。

弘本　ありがとうございます。今のお話の大きな特徴は、その大衆性にあるかと思われます。まず四天王寺が特異な歴史を形づくってきたということがあると思うんです。そのような状況の中で、先ほどの日想観は、例えば仮に文字が読めなくても体験して理解できるということでしたが、いろんな方たちに共有できる価値観のようなものを伝えていくための役割を背負ったものでしょうか。

また、例えば絵堂があって絵解きをしたというのは四天王寺が最初ではないかといったお話を読んだことがあるんですが、そのあたりのところはどうでしょうか。

一本　ええ、平安時代には、貴族たちは四天王寺でお坊さんから、聖徳太子の絵伝を見ながら解説を聞きました。いわゆるライブでお坊さんから教えを聞くということで、そういったところから語りの芸能などがその後に展開していたわけです。だけれど、庶民はどこまでこの絵解きを聞けたのかですね。平安時代はやはり難しかったのかもしれませんけど、中世になるとそういう場所や機会もあったのかもしれませんね。

芸能ということで言えば、しんとく丸のお話では、四天王寺の聖霊会で稚児舞をして、そこで乙姫に一目惚れする場面が出てくるのですが四天王寺は、そういう芸能を披露する場所としても存在していました。

重文「聖徳太子絵伝」第2幅（部分）、遠江法橋筆、四天王寺

重文「聖徳太子絵伝」第3幅、遠江法橋筆、四天王寺

弘本　確かに四天王寺は、文化を生み出し、また文化を活用し、文化の循環のようなものを担っていく場所でもあったのかなと感じました。

小栗判官が四天王寺を通った理由

弘本　会場の方で、ご質問などございましたら、ご発言いただけたらと思います。いかがでしょうか。

下田佑樹　小栗判官の熊野への行程についてですが、先程の地図を見て少し不思議に思ったのが、神奈川の藤沢から名古屋に行って、そこから京都に行くんですよね。どちらかと言うと、伊勢路経由で行ったほうが近いかなと思えます。なぜ京都や大阪に運ばれるようにしたのかなと思うんですが、そこには、やっぱり四天王寺さんに何かがあるからでしょうか。

誰でもウェルカムな場所だったからかなと、今のお話を聞いて思いましたし、四天王寺さんは、苦しむ人を平等に受け入れてもらえる場であったからでしょうね。

四天王寺の当時の様子は、どんな感じだったのでしょうか。皆さんがそこに参詣しに行った様子や魅力も含めてお話くださればと思います。

一本　この藤沢の上人は遊行寺の人で、つまり時宗のお坊さんですが、時宗にとって四天王寺はゆかりの深いところなんです。おそらく遊行寺の上人であれば一遍上人ゆかりの四天王寺は外せないというのは自然な流れでしょう。藤沢の上人も、自分で小栗に「この土車を引くことが供養になる」という札をかけるんです。途中からは上人のあとを継いで、周りの人たちが順送りで小栗の土車を引いていってくれるというお話です。やっぱり熊野街道も、救いの聖地をめぐるという意味で、都からの経路を通り、四天王寺を経由するというのはあるだろうという気がします。

四天王寺は、少なくとも平安時代はかなり特権的な扱いを受けて、天皇や貴族が頻繁に訪れるお寺でした。天皇が来訪された時などには、当時は秘宝中の秘宝だった『四天王寺縁起』をお見せするなど、天皇とか貴族に対しては特別な待遇をしていたこともわかっています。一方で、先ほどもお話しましたが、一遍聖絵などの鎌倉時代の絵画を見ていると、四天王寺には本当にたくさんの人が描かれているんですね。身分に分け隔てなく人々が集まった場所だったようです。

酒井裕一　すごくわかりやすいお話ありがとうございます。大阪は難波宮が今の大阪城の辺りに出来て、そのあと、中世には本願寺になった時には、上町台地は狐とか狼とかが住んでるというような場所だったと、そんなことを以前なにかで読んだことがあるんですけど。

一遍聖絵の四天王寺は、鎌倉時代ですね。それから熊野詣には、平安時代の天皇さんとかも通われていて、その時には天王寺とか住吉さんを訪れたし、源氏物語でも住吉大社が出てきますね。

鎌倉時代、室町の終わりぐらいには多分本願寺が大坂に移ってきていると思うんですが、その頃っていうのは四天王寺は、どんなふうになったのか、わかることがあれば教えてください。

一本　一遍聖絵などに描かれているので、当時のことはある程度はわかるんです。ただ都人の意識としては、例えば『徒然草』にはこの辺は「辺土」であると書かれています。天王寺は辺土だけれども四天王寺の舞楽だけは素晴らしいと。一方で熊野詣や西国三十三か所巡りの霊場にもなった。特に熊野詣では、四天王寺は必ず立ち寄る場所だったわけです。

いわゆる天王寺村という一つの地域というのは、四天王寺を中心にそれなりに栄えていて、そういう熊野詣をする人たちが休憩できる、宿泊できるような施設もあったようです。だから都のような繁華な場所ではなかったんですけども、この周辺には、それなりに人が住んでいたということくらいはわかるという感じです。

中世の四天王寺と周辺の地域の賑わい

酒井　近くには夕陽丘の名前の元になったと言われる藤原家隆の庵があったりして、そういう意味では全くの荒地じゃなくて、やっぱりお寺とかの周りは放置されてはいなかったっていうことですね。

一本　鎌倉時代でも、お寺が焼けたりしていますが、そういう時にも地域の人たちが復興に貢献していますし、法然が現在の一心寺のところに庵をつくったりしていましたし、やっぱり浄土信仰の霊場ということが人を引き付ける大きな要素だったかもしれないですね。

中越慈子　四天王寺さんの西門の整備なんですけれども、私も、お友達とかとお彼岸の時期に西門に夕陽がまっすぐ沈むのを見て、これ偶然やったらすごいなあと話し合ったことがありました。すごいミラクルかもというふうに思いましたが、今日お話を聞いたら、夕陽が落ちるところに西門をつくられたということですね（笑）。

それから、お寺を案内したりする際には、正面は南大門なんだから、まずは、そこから入りましょう、とかと説明したりもするんですけど、四天王寺さんでは、やっぱり古くから西門が南大門以上に賑っていて、四天王寺のイメージになってしまったというのが大きかったというふうに解釈してよいでしょうか。

一本　そうですね。東大寺の南大門もそうですが、寺院において一番大きいものは本来南大門なんですが、四天王寺の場合は、平安時代以降西門が栄えたことで、今や西門が正門のようになっています。

それから、西門の場所では水平線に夕陽が沈む景観が素晴らしいことはもちろんわかっていて、『四天王寺縁起』が出てきた11世紀以降、浄土信仰を取り入れることによって、たくさん人が集まってきたので、門を立派にして整備をしてきたのでしょうね。もちろん夕陽があそこに沈むのはわかっていたというのもあり、その立地をうまく活用したというのが実情でしょう。

文化を生み出す源泉と信仰と土地の力

秋田光彦　お寺の住職をしています。こちらの実感ですが、説経節の主人公のように捨てられた人たちが最後にやって来て救済されたのは、仰る通り信仰に裏付けられた場所性と関連が強いのかと思います。中世の無縁所でつくり出される物語や文学といったものは、この場に埋め込まれ霊力みたいなものと関連しながら生まれてくるものであって、そういう意味で、信仰の力、土着の力という根っこにあるものに関心が向くんですね。

私にとっては、そこの根源的な問題が重要で、今日の文脈で言うと、まちづくり的な賑わいみたいな言葉で語られてしまうとちょっと違うなと思えるところはあり

ます。よろしければ先生が考えておられるところをお聞かせいただけたらと思います。

一本　今日はわかりやすくお話をするということで。大きなポイントとして浄土信仰を挙げさせていただきましたけれども、一番最初にお話したように、四天王寺には、浄土信仰だけでなくて、それぞれの人が信仰できるいろんなアプローチの仕方がありました。

文学と信仰の関わりについても、縁起の中でも、すでに四天王寺という場所にはそういう語りの要素がすごくあるというのは感じています。一言で言うのは難しいのですが、特に説経節というのは、やはり昔の芸能者というのがどちらかというと虐げられる側の人ですから、そういった人たちが四天王寺を救いの場として認識していたからこそ、その物語の舞台となったのだろうと思っています。

「摂津国四天王寺図」　橘守國筆、四天王寺

未来の社会に続く聖徳太子の教え

会場1　私は全く知らないので、お尋ねしたいんですけれども、施薬院とか療病院とか悲田院とかが存在したと言いますが、それはいつからあったのか。その後の史料やあるいは考古学的に例えばここにあったということがわかるようなものが出てきたことがあるのでしょうか。

一本　光明皇后が興福寺内に施薬院・悲田院を設けたという記録があるように、制度としては、奈良時代からあるかなり古くからの制度だったと思うんです。けれども、実際にそれがどういった実態のものだったのかはよく分からないのが実情です。

おそらく古くから四天王寺にもすでにあった四箇院の制度を、『四天王寺縁起』の中で改めて明文化したものではないかと考えています。四天王寺が焼けて、これから再出発していくうえで、四天王寺のいろいろな建物であったり信仰であったりするものをきちんともう一度、太子の言葉で定義し直そうとしたのでしょう。すでに機能している四箇院について、誰が始めたのかということを、太子自身が、それは自分であり、自分の本願であるのだと明確に宣言したわけです。

それ以降、感銘を受けた鎌倉時代の忍性のような人たちが、この制度を各地に広げていきます。そのような意味で、制度としてはやはり古いのではと、私は思っています。

多様な人たちのコミュニティの場でもあった

弘本　長い歴史の中でも本当に四天王寺さんは、もうこれでもかというほどに焼失したり倒壊したりしているわけですよね。そのたびに不死鳥のように蘇り続けてきた。そしてこの長い歴史の中でダイナミックに変化していくのだけれど、その原点には常に聖徳太子の言葉に戻っていくというような求心力があるんだなと、あらためて認識させていただきました。

それと先ほど秋田さんからのお話にあったような、その核心にある信仰といったものの重要性というか、その場所に宿っている力が相互作用とか関係性を生んで、それが現代に続く精神的な糧にもなっていってるんだなというような印象も、皆さんのお話ややり取りを聞きながら感じたところです。

最後に一本さんから時代を超えて都市に求められるものというのは何なのかにつきまして、これからの社会に向けて、四天王寺の研究にずっと取り組まれているお立場から、考えておられることをお話しいただければと思います。

一本　そうですね、今日お話したことも含めてなんですけれど、ルーツがやっぱり聖徳太子の言葉にある、このことが、お太子さんの信仰を下敷きとして、その上に非常に多様な信仰のかたちが展開されていく要因になったのではないかと思います。それは各宗派の様々な信仰を踏まえて、四天王寺の長い歴史もあいまって、多種多様な人が揃うコミュニティの場であったという感じです。

四天王寺という、いかなる時もどんな人でも受け入れる場が存在する。一方で、地域の人がその精神的な拠り所としての四天王寺を守っていこうというふうに、地域の人たちとの相互的な関係性というのが、平安時代以降ずっと現在まで継続しており、これは本当にすごいことだと私自身、常々感じているところです。そういったものが地域の一つのベースになっているんだと思いますね。

その点で「四天王寺さんに守られているから、自分たちもお寺を守っていくんだ」と、そういう四天王寺とともに過ごす地域での、そうした関係性が一つの都市としてのアイデンティティみたいなものを形成していたんじゃないかと思っているわけです。

これも含めて、一つの都市や地域において、それは宗教的な面に限らず、社会的であったり文化的であったり、要するに地域の文化を形成しているアイデンティティというものが、重要不可欠なことなんじゃないかと思います。

少なくとも天王寺という地域は現実的にそういう相互の関係性の中で信仰をずっと守ってきたと思います。そういう意味で、コミュニティの核みたいなものというのは、同時に一つの都市の核になるんじゃないかなというふうに感じています。

弘本　ありがとうございました。最近、レジリエンスという言葉がよく使われますけれど、それは人や地域や社会が回復していく力だろうと思います。そこには歴史的文化的に培われてきた相互の関係性が深く関わるのだと実感します。

本当に難しいテーマを解きほぐしていただきました。これで、2022年の秋のトークライブを終了させていただきます。ありがとうございました。

2022年12月11日まで1か月間、当日の録画映像を希望者への限定配信でご覧いただきました。